

三重県において里山はどのように分布し、現在ではどのような植生がみられるのか？

図1には地形分類図と現存植生図を利用して作成した里山分布図を示します。この図では、かつて農業や日常生活などのために人間に利用されていたと考えられる森林を「里山」としました。図2には、里山分布図と現存植生図を利用して作成した「里山」における各植生タイプの分布図と面積割合を示します。

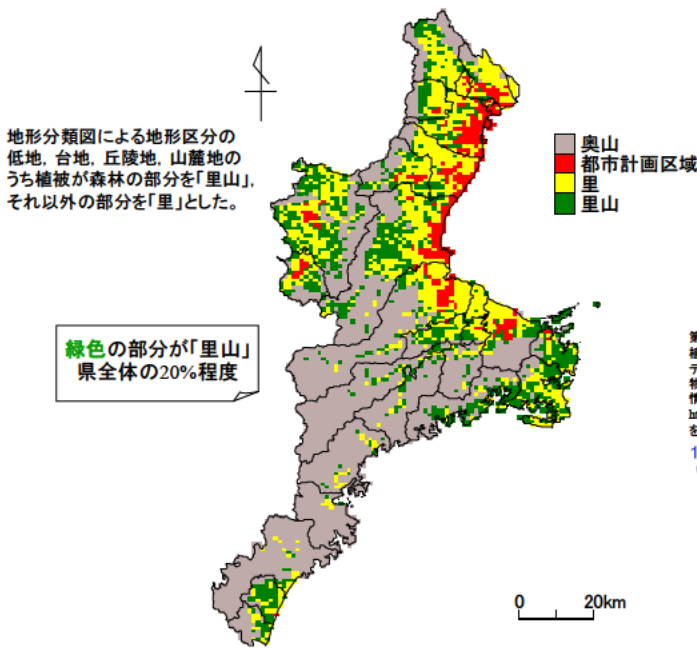


図1. 三重県における里山の分布

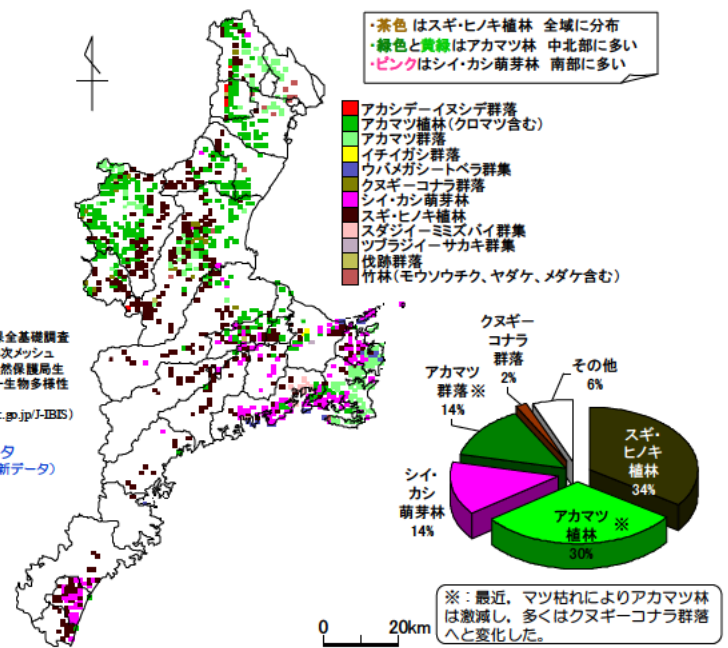


図2. 三重県の里山における植生タイプ分布と面積割合

里山は主に伊勢平野の周辺部や伊賀盆地、志摩半島沿岸部、御浜町付近に分布していた。

里山には気候条件や地形・地質条件、また人為の影響の程度などの違いによって様々な植生タイプがみられた。

里山における主要植生タイプはどのような現況か？

県内の里山に112箇所の調査地を設定し(図3)、調査を行った結果から明らかになった主要植生タイプの現況を示します。

①スギ・ヒノキ植林

- 比較的手入れが行われており、林床植生の出現種数、特に草本種、シダ植物が多かった。
- 適度な管理を行うことで動物にとって重要な生息地となりうる可能性があり、面積も大きいことから里山景観全体の保全・管理を考える上で無視できない。

スギ植林
ヒノキ植林

③コナラ林(クスギーコナラ群落)

- 低木層や林床植生が発達しており、多様な樹種がみられ、出現種数が最も多い植生タイプであった。
- 林床には常緑広葉樹やササ類が繁茂している箇所も多く、種多様性の低下が懸念された。
- 将来は常緑広葉樹林へと変化する可能性がある。
- コナラの大径化が著しく、萌芽更新が難しくなりつつある。

大径化するコナラ
林床には常緑広葉樹

②アカマツ林(アカマツ植林+アカマツ群落)

- 出現植物種数はコナラ林について多く、特に低木層が発達する傾向があった。
- アカマツ以外にはコナラやヤマザクラ、リョウブ、ネジキ、ヒサカキ、ソコゴ、コバノミツバツツジなどの出現頻度、優占度が高かった。種組成がコナラ林と類似。
- マツ枯れが進行している林分が多くみられた。アカマツ林とコナラ林では種組成がよく似ていたことから、マツ枯れ後は多くがコナラ林へ変化する可能性が高い。
- 低木層や林床植生にコナラやシイ・カシなど高木性広葉樹がなく、マツ枯れ後は亜高木種や低木種が密生した藪のようになる箇所もみられた。

密生した林内
マツ枯れ被害林
林相改良試験

④シイ・カシ萌芽林

- シイ・カシ萌芽林ではツブラシイ、アラカシ、タブノキ、ヤブツバキ、サカキ、クロバイ、ヒサカキなどの出現頻度、優占度が高かった。
- 低木層、林床植生はあまり発達せず、出現植物種数も少なかった。
- 次世代木であるシイ・カシの稚樹は順調に生育していた。

林内

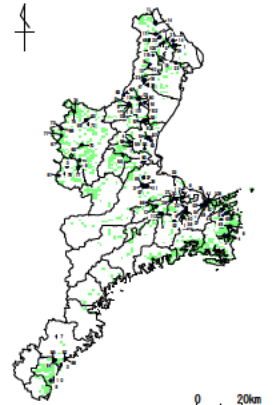


図3. 調査地の位置

三重県の里山のこれから —まとめにかえて—

1960年代までの里山では、定期的な伐採や下刈、落ち葉掻きなどの作業が行われ、林床には常に何もなく、明るい状態に保たれていました。しかし、その後は里山が人間に利用されなくなったことや、周辺地域の開発の影響などにより、植生に様々な変化が生じています。例えば、アカマツ林では、ほとんどのマツがマツ枯れにより枯死してしまったために、コナラ林などに変化しつつあります。そのコナラ林でも下刈などが行われなくなったことで、一面ササで覆われたり、低木層や林床植生が発達して、林床が暗くなっており、そのような場所では明るい環境を好む植物種が生育できなくなることから、出現植物種数が減少しています。また、シイ・カシなどの常緑広葉樹が多く侵入する一方、コナラは大径化によって萌芽力が低下しており、しだいに常緑広葉樹林へ移り変わりつつあると考えられます。このように、とんとん変化している里山ですが、まずは対象地域ごとに現在の状態を知ったうえで、今後どのような森林としていくことが望ましいのかみんなで考えていく必要があります。

